地域研究年報　38　2016　1–29

茨城県大洗町における海浜観光地域の継続的発展要因

渡邊瑛季・阿部依子・伊藤瑞希・猪股泰広
王　瑩・名倉一希・松原伽那・山下清海

本稿では，茨城県大洗町における海浜観光地域としての継続的発展の要因を明らかにした．大洗町では明治期以降，観光地化が進み，第二次世界大戦後から現在まで海水浴を中心にマスツーリズムを基盤とした観光地域として発展してきた．一方で，マスツーリズムの内容は1990年代以降，旅行目的の増加と，観光者の出発地の拡大によって変化しており，大洗町の観光の継続的発展に寄与している．これは，水族館をはじめとする集客施設，サーフィン，コンベンション，食などの多様な観光目的を大洗町が受容してきたことで，観光者の出発地が関東地方全域に拡大した点にみられる．マスツーリズムは個人旅行者だけでなく，学校の校外行事，ツアー，宿泊施設における企業や組合によるコンベンション目的の団体旅行者によっても支えられており，こうした多数の旅行者が来訪する背景として，大洗町の位置的条件，広大で人口が多い内陸出発地の存在があげられる．
キーワード：海浜，マスツーリズム，海水浴，宿泊施設，大洗町

Ⅰ　はじめに

Ⅰ－1　研究の背景と目的

海浜は，漁業，観光，港湾など人間活動に適合するように利用されてきた．観光的利用としては，海岸景観の観賞や海水浴，サーフィンなどのマリンスポーツがあげられる．この中でも，海水浴は日本における夏季の主要な観光目的となっている．

日本における海水浴の原初形態は，今日のような娯楽目的ではなく，明治初期に始まる潮湯（うしお）治と呼ばれる療養であった（小口，1985）．その後，20世紀初頭から海水浴が普及し始め，1920年代前半までに大都市近郊の海岸に多くの海水浴場が開設された（青木，1974）．

高度経済成長期に入った1950年代後半以降，海水浴に対する需要が増大し，海水浴場は大都市近郊からさらに外縁部にも形成されるようになった．これらの海水浴場への訪問は宿泊を必要としたことから，既存の旅館に加え，民宿と呼ばれる宿泊施設の供給が進展した．石井（1970）は，日本の民宿地域が大都市から50～200km圏内に位置する大都市依存型の観光地域であり，「海水浴場立地型」と「スキー場立地型」に分けられるとした．このうち前者の成立は，海水浴場までの交通機関の発達とレジャーブームによる旅行距離の増大によるとしている．

こうした民宿地域の成立には，農家や漁家が自宅の一部を宿泊者のために提供し始めたことが背景にある．観光需要の増大に伴って設備投資が進展し，通年営業化したり，宿泊業に特化したりする世帯も出現した（呉羽，2009）．しかし，1990年代後半以降，観光者の減少によって関東，信越地方の民宿の廃業も出現しつつある（山村，2006）．

日本の海浜観光地域に関する地理学的研究は数多くなされてきている．

海浜沿いの民宿地域の形成過程を明らかにした研究は蓄積が多く，落合ほか（1982），淡野（1985），淡野（1986），宇都木ほか（1996），松本ほか（2000），

井口ほか（2006），市川ほか（2012）などがある．これらの研究では，農家や漁家が高度経済成長期における海水浴などの観光需要の増大に伴う民宿の開業経緯，労働力構成，経営形態などを明らかにし，地元住民による宿泊施設の集積に特徴づけられる観光地域の形成過程が解明された．

このうち，淡野（1985）は，三重県鳥羽市相差地区における民宿の導入に際して，鉄道を近隣地域に付設した近畿日本鉄道（近鉄）がイニシアチブをとったとし，近鉄は海水浴ができ，低廉な料金で宿泊が可能な民宿を地元民に開業させることで鉄道の乗客の誘致を狙った．この際，離島でなく遊泳可能な砂浜がある相差地区が選定された．人口が多い大阪府や愛知県からのアクセスに優れていることも，民宿経営の基盤となったとしている．首都圏では，松本ほか（2000）が茨城県ひたちなか市阿字ヶ浦・磯崎地区における1990年代の動向を分析した．その集客圏は関東一円に及び，とくに埼玉県や栃木県との強い結びつきがみられた．しかし，高速道路の開通による交通条件の変化によって，1986年頃から日帰りと呼ばれる観光行動が進展したことで，宿泊業が低迷している．そこで，会社等の宴会や研修の開催によって宿泊需要を創出しているものの，バブル崩壊後の景気後退の影響を受け，多くの観光施設の経営状況は厳しいとしている．

これらの研究では，東京，大阪，名古屋など大都市の近接性を背景として，多くの観光者の出発地が大都市に集中しており，そのためにマスツーリズムが進展したとされている．すなわち，一大市場である大都市からの観光者の来訪を背景とした分析が中心である．

1970年代以降においては，海浜観光地域に海水浴以外の付加価値としてマリンスポーツの導入が進んだ．1990年代以降，その経緯や背景を論じた研究がみられた．例えば，スキューバダイビングの導入過程を論じた池ほか（1999），池（2001），またマリーナの立地と海域利用を明らかにした佐藤（2001），サーフィン客の誘致経緯を明らかにした小林ほか（2012）などがあげられる．

1990年代後半には，新たな観光目的としての食への高い関心がみられるようになり，漁業者が水産物の新たな販路として観光者を求めるようになった．沿岸地域における研究は，富山県黒部市の漁協が小ロットの水産物の販路確保のため，集客施設と飲食店を開業したことを述べた横山ほか（2013），茨城県北茨城市において家庭消費されていたアンコウが観光客に民宿で提供されるようになった背景を述べた市川ほか（2015）がある．

観光社会学においては，観光の大量化・大衆化に特徴づけられ，観光地の文化変容，環境の汚染や破壊などの負の諸効果をもたらしたとされるマスツーリズムの弊害を批判し，持続可能な観光のあり方を指すオールタナティヴツーリズムという用語が1980年代以降用いられるようになった．1990年代にはこれと同一の事実を指すサステイナブルツーリズムという用語も生まれた[1)]（安村，2003）．マスツーリズムの負の側面が示される一方で，Allan（2003）が指摘するように，マスツーリズムはその形態を組織的また時空間的に変化させつつも，依然として広くみられる観光形態である．しかし，観光形態が多様化してきた1990年代以降の観光地域におけるマスツーリズムの役割は，ほとんど明らかにされていない．

以上を踏まえ，本稿では，茨城県大洗町における海浜観光地域としての継続的発展の要因を明らかにすることを目的とする．大洗町は海水浴や大型の水族館を中心に大勢の観光者を受け入れる観光地域として発展してきたため，研究対象地域として適切であると判断される．

上記の目的を達成するため，大洗町の観光におけるマスツーリズムの発展過程を示したうえで，現在のホストとゲスト双方の特性と需給の一致要因を分析する．

研究の手順は以下のとおりである．Ⅱ章では，明治期以降の大洗町の海浜観光地域としての発展過程を文献また聞き取りに基づいて説明する．Ⅲ章では，現在のマスツーリズムの基盤となっている観光目的を取り上げ，ホストとゲスト双方の特性と需給の一致要因を明らかにする．Ⅳ章では，

マスツーリズムが維持されつつも，その内容が変化していることを複数の観点から示す．なお，現地調査は2014年10月および2015年５月，８月，11月に実施した．

Ⅰ－２　研究対象地域の概要

１）自然環境

大洗町は関東平野の北東に位置し，東は太平洋，西は汽水域である涸沼および涸沼川，北は那珂川にそれぞれ面し町域の三方を水域に囲まれている（第１図）．

大洗町の自然環境を特徴づけているのは台地より東側の岩礁や砂浜といった海岸地形である．大洗町北東部に位置する大洗岬から宮下地区周辺に露出している礫岩層は「大洗層」と呼ばれ（安藤，2006），大洗特有の岩礁景観を形成している．また岩礁の侵食によって人が浸かることのできる大きさのタイドプール（潮だまり）という地形が形成されたことで，潮湯治の適地となった．潮だまりは大洗町ではダマッコと呼ばれている．

一方，大洗岬以南を中心に，大洗町に広く分布する砂浜については，那珂川からの豊富な土

第１図　研究対象地域（2015年）

砂供給と沿岸流が深く関与しており（谷沢ほか，2009），この豊富な土砂が南向きに卓越する沿岸流により運搬され，大洗町域の海岸に堆積し，砂浜を形成・維持している．町南部の夏海海岸では浜崖が形成されるなど著しい侵食傾向を示す一方で，大洗サンビーチでは海岸線が約500m沖合へ前進するという報告もある（三村ほか，1991；宇多ほか，2012）．後者の砂の堆積は，遠浅の砂浜を形成したため，海水浴やサーフィンの適地となった．

大洗町中心部から約15km南にあるアメダス鉾田観測所における2014年の観測結果は年間降水量が1,780mm，年平均気温が13.7℃，最寒月（１月）の平均気温が2.4℃，最暖月（８月）の平均気温が25.1℃であった．大洗町では気温の年較差が内陸部と比較して小さく，海陸風が卓越し，海洋性の気候を示す．

２）人文環境

大洗町は，茨城県中央部に位置する．西は県庁所在地である水戸市，北はひたちなか市，南は鉾田市にそれぞれ接し，東は太平洋に面している．東京都心部から北東に100km，前橋市から東に140kmの位置にある．

大洗町は1954年に旧磯浜町と旧大貫町が合併して成立し，1955年に南隣の旭村の一部を編入する形で現在の町域になった．面積は23.2km^2，2015年11月現在の人口は17,584人である．

大洗町で特色ある産業は，観光業，漁業，水産業のほか，大洗町成田町に立地する日本原子力研究開発機構大洗研究開発センターに代表される原子力産業があげられる．

2000年代以降，東京や北関東から大洗町への高速道路によるアクセスが向上してきた．1996年に東水戸道路が開通し，これは2000年の北関東自動車道（以下，北関東道）の一部区間開通によって常磐自動車道（以下，常磐道）へと接続された．これにより東京都心部から大洗町まで約１時間30分で到達できるようになった．また，2011年３月の北関東道全線開通によって，とくに群馬県や栃木県からのアクセスが向上し，例えば前橋市から大洗町までは約２時間で到達可能になった．

大洗町の周辺には，茨城県でも有力な観光資源が分布している．水戸市には，日本三名園の一つに数えられる偕楽園があり，ひたちなか市の那珂湊漁港周辺は鮮魚店や水産加工品販売店が多数立地し，昼食時間帯には団体旅行のバスの出入りも頻繁である．また，ひたちなか市北東部には国営ひたち海浜公園があり，春季にはネモフィラ，秋季にはコキアの広大な花畑を見ることができる．

Ⅱ　海浜観光地域としての大洗町の変容

第１表には，大洗町の観光に関する歴史をⅡ章で示す時期区分に従ってまとめた．

Ⅱ－１　黎明期（明治～第二次世界大戦前）

１）磯節による大洗の宣伝

磯節は大洗町において唄い継がれている民謡であり，日本三大民謡の一つとも称される．

その起源は江戸期に大洗周辺の漁師が口ずさんだ舟唄であるとされている（大洗町史編さん委員会，1986）．

このように舟唄として生まれた磯節であるが，明治期になると引手茶屋「鍵屋」の主人である渡辺精作によって歌詞や囃子言葉が補足され，座敷唄として唄われるようになった．渡辺精作が自ら手を加えた磯節を祝町遊郭の娼妓や芸妓に教えたことにより，明治中期以降，磯節は遊郭を媒介として全国的に知られる座敷唄となった．

渡辺精作の他にも，磯節を全国に広めた人物がいる．1877（明治10）年に磯浜町に生まれ，漁師を経験した後に旅館「金波楼」で按摩（あんま）として働いていた関根安中は，ある日休養のために投宿していた水戸市出身の第19代横綱である常陸山の按摩の担当になった．その際に関根安中が幼時より漁船の上で習った磯節を唄ったところ，常陸山は非常に感動した．それ以来，常陸山は関根安中を地方巡業に同行させ，宴会などで磯節を披露させながら全国を回った．関根安中の磯節は人気になり，

第１表　大洗町の観光に関する歴史

期	年	出来事
黎明期	1695	水戸光圀が祝町に遊郭５軒の建設を許可
	1870	料理店川崎屋が旅館兼業化
	1890	旅館金波楼開業
	1910	磯浜漁港東堤防着工
	1919	漂砂の堆積により磯浜漁港の工事中止
	1922	水浜電車（浜田木材町－磯浜）が開通
導入期	1949	磯節キャラバン隊が全国を巡業
	1951	大洗県立自然公園が指定される
	1952	県立大洗水族館開館
	1953	大洗ゴルフ倶楽部開業
	1958	大洗港が地方港湾に指定
	1961	大洗港埋め立て開始
発展期	1966	水浜電車が全線の営業を廃止
	1979	大洗港が重要港湾に指定される
	1984	大洗サンビーチ供用開始
		常磐道（千代田石岡IC－那珂IC）開通
	1985	カーフェリー（苫小牧，室蘭線）就航
		鹿島臨海鉄道大洗鹿島線開通
	1986	大洗港区第３埠頭地区埋立竣功
	1988	大洗マリンタワー開業
		県立大洗海浜公園供用開始
再編期	1992	茨城県大洗マリーナ開業
	1994	大洗港区第４埠頭地区埋立竣功
	1999	ゆっくら健康館開館
		大洗町営温泉スタンド設置
	2000	北関東道（友部JCT－水戸南IC）開通
	2001	大洗わくわく科学館開館
		太平洋クラブ大洗シャーウッドコース開業
	2002	アクアワールド茨城県大洗水族館開館
	2006	大洗リゾートアウトレット開業
	2009	めんたいパーク大洗開業
	2010	大洗町漁協直営店 かあちゃんの店開業
	2011	北関東道全線開通

（聞き取り，山形（1981），大洗町史編さん委員会（1986），大洗町教育委員会生涯学習課（2013），茨城港湾事務所大洗港区事業所提供資料により作成）

1922（大正11）年にはレコード「安中磯ぶし」として販売された（大洗町史編さん委員会，1986）．

こうして磯節は茨城県を代表とする民謡として全国で知られるようになり，海浜観光地域としての大洗の宣伝にも貢献することになった．

２）磯浜町における観光の興り

現在旅館や民宿が多く立地している磯浜町の観光地としての発展は，明治期以降，「大洗さま」と呼ばれる大洗磯前（いそざき）神社東の宮下地区から始まった．宮下地区における最古の旅館は，現在も営業を続けている「魚来庵」である．魚来庵は1865（慶応１）年に料理店「川崎屋」を開業したが，1870（明治３）年に旅館の兼業を開始した．その後，1889（明治22）年に尾崎紅葉の命名により現在の「魚来庵」に改称した．この頃になると，大洗磯前神社への参詣以上に，海水浴の需要[2)]が高まった．

日本において海水に浴することによってもたらされる治癒効果は平安，鎌倉期にはすでに知られていたが，潮湯治の概念は江戸期に西洋医学を学んだ蘭学者らによってもたらされたものである（國木，2012）．1885（明治18）年に神奈川県の大磯で海水浴場が開設されたのを皮切りに，1890（明治23）年頃には全国の海浜に続々と海水浴場が開設されるようになった（蓼沼，2007）．行楽としての海水浴文化は，来日した外国人によって明治中期頃には日本にもたらされていた（國木，2014）が，全国に普及したのは明治後期頃である（小口，1985）．

全国的な潮湯治と海水浴の普及とともに，大洗でも明治期に海水浴場が形成された．潮湯治は1880年代頃から宮下地区を中心に行われるようになった．蓼沼（2007）によると，1883（明治16）年の夏季には磯が発達した大洗岬の岩につかまり海水冷浴を行う者がいた．1880年代後半には，大洗岬に「大洗海水浴場」が開設され，東京などから多くの人が訪れるようになった（写真１）．

1895（明治28）年には磯濱病院院長の高橋信行

写真１　明治期の大洗海岸

（小林楼提供）

によって『大洗海水浴場誌』が記され，これには大洗の潮湯治が消化器諸病，呼吸器諸病，皮膚諸病，神経諸病等の様々な病気に効果があることが述べられている．

潮湯治には海浜で海水に浸かる冷浴と海水を貯槽し温かくして浸かる温浴がある（國木，2014）．大洗における海水浴旅館は，1888（明治21）年頃は木根屋，魚来庵，金波楼，小林楼の４軒しかなかったものの，1893（明治26）年頃には風月楼と金波楼別邸を加え６軒に増加した（蓼沼，2007）．また，1902（明治35）年に滝興治によって記された『常陸の海水浴』には，旅館「滑川楼」（現在の「なめや旅館」）について「海岸に接して眺望に富み，…中略…常に海水温浴を設けて客を待つが故，此地に遊ぶもの冷浴，温浴二つながら自在なるを得べし」，宮下地区の旅館について「何れも海岸に接し，崕端に沿ふて建設せらる，其重なるもの金波楼，魚来庵，小林楼，ホテルの四あり四時海水温浴場を設けて来客に便す」といった記述があり，明治後期において複数の海水浴旅館が存在したことがわかる．

明治後期にはレジャーとして海水浴が行われるようになった．1910（明治43）年に磯浜町において磯浜漁港築港のための工事が着工されたが，1919（大正８）年に台風による漂砂の堆積により中止され，結果として港ではなく，「磯浜海水浴場」として利用されることとなった．さらに，1922（大正11）年12月には水浜電車（浜田－磯浜）が開通したことで水戸市と結ばれ，海水浴客の増加につながった．1926（大正15）年には磯浜－祝町間が開通し，この時開業した磯浜海水浴場の最寄り駅である曲松駅は夏季には水戸市方面からの海水浴客で混雑していた（蓼沼，2007）．

上記の明治期以降の潮湯治及び海水浴を目的とした来訪者の増加に伴い，磯浜町において，旅館の開業や拡大が相次いだ．宮下地区においては，大洗海水浴場で潮湯治が行われていた頃に開業した旅館の拡大が顕著であった．「金波楼」を例に挙げると，1890（明治23）年の開業後，1893（明治26）年頃に別邸の建設，1900年代に本館の建て替え，1901（明治34）年頃に第二別邸，第三別邸，「金波楼大洗ホテル」の建設と，潮湯治・海水浴客の収容定員増加を企図した設備投資を急速に進めた（蓼沼，2007）．さらに，「金波楼」への筆者らの聞き取りによると，その後，増改新築を続けたいくつかの旅館の経営を兄弟に譲り，それらが現在の宮下地区に立地する複数のホテルの創業につながったことからも，明治以降の海水浴場としての宮下地区の発展が指摘できる．また，現在の曲がり松商店街周辺において，旅館の開業もみられた．明治末には磯浜町に武藤屋，肴屋，滑川楼，豊後屋の４つの旅館が存在した（大洗町生涯学習課，2013）．1940（昭和15）年には茨城交通興業株式会社（現茨城交通株式会社）が金波楼大洗ホテルを買収して，1941（昭和16）年に大洗ホテルとしてホテル事業を開始した．

Ⅱ－２　導入期（第二次世界大戦後～1965年）

１）旅館経営者主導での宣伝の開始

第二次世界大戦後数年間は食糧難と物資不足のため，観光に訪れるものはわずかで，そのほとんどは日帰り客であった．そのため，旅館は利用者の低迷に困窮し，営業の維持が喫緊の課題であった．この打開策として，旅館業者自身による広域的な宣伝活動が開始された（大洗町史編さん委員会，1986）．まず1946～47年に，金波楼，那珂川楼，おかめ旅館の３軒が水戸駅前の焼跡に大きな看板を立てた．その後，1949～50年頃には観光協会が設立され，彼らが率いる磯節キャラバン隊による宣伝が始まった．磯節キャラバン隊は，地元磯浜の芸者が構成員となり，旧磯浜町や地元企業の資金提供を受けながら，磯節の歌と踊りを行脚先の駅前や商工会，県庁，市役所前などのステージで披露し，自動車で街中を走りながらの宣伝も行うなどの活動をしていた．まず内陸県である群馬や栃木において観光客誘致を図り，その後東京や福島の会津地方へも赴くなど，活動範囲は広がっていった．

2）茨城県による観光施策の開始

地元主導での大洗町の観光宣伝がなされるようになり，それからやや遅れて，県も動き始めた．茨城県は，1950年にポスター・チラシによる海水浴場の宣伝を開始した．1951年には，大洗県立自然公園[3)]を指定し，公園地域内である大洗海岸沿い（ビーチパレス下）に大洗水族館を建設，1952年に開業した．また，1953年には同じく県立自然公園内の県有地および町有地において大洗ゴルフ倶楽部が開業しており，海水浴以外の新たな観光目的が加わった．当時茨城県知事の友末洋治は，海水浴依存の大洗町における夏季以外の活性化を図るため，ゴルフ倶楽部造成の着想に至った（金井・石川，2003）．したがって，これらの施設の開業はレジャーの通年化を促す点で重要であった．開業当時の大洗水族館は年間20万人以上の来場があり（大洗町史編さん委員会，1986），大洗ゴルフ倶楽部は開業当初の年間来場者が１万５千人を前後していたが，1959年には年間４万人を突破し，設計時の見込みを大きく上回るほどの来場であった（金井・石川，2003）．

3）海水浴人気の高まり

２）で述べたような戦後の県の施策により，レジャーの多様化・通年化が図られた一方で，観光の中心は夏季の海水浴であり，1950年代の大洗町における海水浴客数は年間250万人に及んだ（大洗町史編さん委員会，1986）．当時の海水浴場は，1910年代の磯浜漁港建設計画による築堤に囲まれた「磯浜海水浴場」，現在の大洗サンビーチの南寄りに位置していた「大貫海水浴場」，および大洗岬以北の「大洗海水浴場」の３つであった．とくに磯浜海水浴場は，当時，市街地に隣接する形で砂浜が存在していた（第２図）．そのため，市街地に集積していた民宿から水着のまま海水浴場を行き来する者が多くおり，夏季の商店街はそのような人々が闊歩するのが日常景観であったという．また，当時は茨城交通水浜線（水浜電車）が上水戸駅～大洗駅を結んでおり，水戸市方面から水浜電車を利用し，最寄りの曲松駅で降車して磯浜海水浴場を訪れる者も多かった．曲松駅は水浜線内でも規模が大きな駅であり，夏季は海水浴客で賑わっていた．以上のような海水浴場，宿泊施設，鉄道駅の近接性は，磯浜海水浴場のみならず，大洗町での海水浴に多くの人々をひきつけていた

第２図　1961年の大洗町の海岸の様子

（1961 年国土地理院撮影空中写真 KT-61-10 C21-18により作成）

といえる．

Ⅱ－３　発展期（1965年～1980年代）

発展期においては，1960年代の後半から始まるとされる全国的なレジャーブームを背景に，磯浜海水浴場や大洗海岸に海水浴に訪れる観光者が増加した．また旅館，保養所の新規開業のほか，1965年以降，夏季営業の民宿が磯浜町を中心に相次いで開業し，地元住民の宿泊業への参入が進展した．茨城港大洗港区（以下，大洗港区）の建設，高速交通網の整備などインフラの整備も進んだ．

1970年夏には「大洗こどもの国プール」，「海のこどもの国大洗水族館」が現在の大洗水族館の場所に開館し，夏の入場者は５万人を超えた（大洗町史編さん委員会，1986）．大洗水族館は夏以外にも春や秋の入場者も多く，このような施設が立地していた祝町が賑わっていた．また祝町には，郵政省簡易保険センターや国鉄保養所など公・民間の保養所も多数建設された．1984年には大貫町に南北１kmにも及ぶ海水浴場である「大洗サンビーチ」が造成された．

発展期においては，大洗町を取り巻く交通網に大きな変化があったのも特徴である．1984年の常磐道千代田石岡－那珂インターチェンジ（以下，IC）間の開通や1985年の鹿島臨海鉄道大洗鹿島線の開通などにより，東京からのアクセスが容易になった．また同年に谷田部町（現つくば市）を主会場に国際科学技術博覧会（筑波万博）が開催された．この開催に合わせ，大洗町では新規開業やリニューアルをした宿泊施設もあった．

発展期に大洗町の海岸沿いの景観を一変させたのが大洗港（現茨城港大洗港区）の建設である．大洗港の整備計画は，首都圏の人口急増に伴い，東京湾への貨物の流れが過密化する中で，北関東の開発を促進して首都圏集中を緩和していこうという国の政策の一環として計画され，茨城県の広域的流通港湾群の造成構想が立てられて始まった．

1961年に大洗港起工式が行われ，1970年に最初の船が入港し，1971年には港の最も東側にあたる第１埠頭地区が完成した．大洗港の着工には約80億円の建設費が投じられ，外かく施設や係留施設の設備，水産品の取り扱いを主体とした漁業施設が設置された．交通体系の整備や観光レクリエーション施設の設備も図ることとなったのである．

その後，1978年に第２埠頭地区が完成し，1979年に大洗港は重要港湾に指定された．大洗港は単なる漁港のみの利用だけでなく，「流通港湾」として利用できるよう要望を受けた．300億円余りを費やして作られた3,000mを超す岸壁や物揚場，50万m^2の泊地を持つカーフェリー用の港が誕生した．1985年には大洗港フェリーターミナルビルが完成し，商船三井により大洗港と苫小牧港，室蘭港の間に週６便の旅客貨物混載のカーフェリーが就航した（写真２）．カーフェリーの就航以降，大洗港は首都圏と北海道を結ぶカーフェリー基地として発展してきた．1993年には室蘭航路，苫小牧航路ともに増便された．

1986年に第３埠頭地区，1988年に県立大洗海浜公園と大洗マリンタワーが開業した．1992年には大洗マリーナが供用を開始した．1994年には第４埠頭地区が竣工し，新しい旅客ターミナルビルも完成した．このようにして現在の海岸線が形成された（第３図）．

写真２　茨城港大洗港区に停泊するさんふらわあ号と貨物ターミナル

貨客混載フェリーのさんふらわあ号は１日１便または２便が就航し，北海道苫小牧港と18～20時間かけて結んでいる．これに載せるシャーシと呼ばれる台車が取り付けられたトレーラーが多数駐車されている．

（2015年５月　渡邊撮影）

第３図　茨城港大洗港区の施設配置と建設年

注）カッコ内は埠頭については埋立竣工年を，施設については開業年を示す．

（茨城港湾事務所大洗港区事業所提供資料，聞き取りにより作成）

1980年には観光者数が300万人を超え，震災の起きた2011年を除き現在も400万人以上が観光に訪れている．1985年頃には民宿が140軒（うち年間営業は22軒）存在するなど，宿泊施設数が最も多い時期であった．第４図より，大洗町における宿泊者数は1980年代前半には40万人近くであり，とくに1988年と1989年には60万人以上であった．我々の調査における各宿泊施設への聞き取りでも，1990年頃までの時期を売り上げの最盛期と回答した場合が多かった．とくに夏季の繁忙期では町内の道路が観光者の自動車で渋滞し，民宿には「廊下でいいから寝させて欲しい」という客が絶えないほどであったという．宿泊施設利用者は海水浴客以外にもみられ，1967年に完成した原子力研究所大洗研究所（現日本原子力研究開発機構大洗研究開発センター，以下原研）[4)]や工事関係者など仕事での利用者も多かった．

第４図　大洗町における都県別宿泊者数の推移（1981 ～ 1989 年）

（『大洗のあらまし’91』により作成）

Ⅱ－４　再編期（1990年代～現在）

第５図には茨城県における市町村別の海水浴客の推移を示した．茨城県全体で海水浴客は急減しており，2010年の茨城県全体の海水浴場入込客数は1999年の半分以下である．2011年３月の東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故の影響で，大洗町の海水浴客も急減した．2013年度までに年々回復しているが，震災以前の入込客数には戻っていない．

第６図には大洗町における観光入込客数の推移を示した．2000年代前半に入込客数が約400万人に増加し，2006年には約584万人に達した2011年には東日本大震災の影響で減少するが，それ以降，入込客数は微増傾向にある．このように，入込客数の増加が顕著であったのは，大規模な集客施設の開業や既存施設の改装が行われ，それらが新たな観光目的になったためだと考えられる．

大洗町には1990年代以降，大規模の集客施設が立地した．1992年に茨城県大洗マリーナ，1999年に町営のゆっくら健康館，2001年に大洗わくわく科学館，2006年に大洗リゾートアウトレット（写真３），2009年にめんたいパーク大洗がそれぞれ大洗港区とその周辺に開業した．また，2002年にはアクアワールド茨城県大洗水族館がリニューアルオープンし，展示面積が大幅に増床された．

北関東各県から大洗町へのアクセスも向上した．1996年に東水戸道路が開通し，2000年に大洗町の最寄りICである水戸大洗ICと常磐道が結ば

第５図　茨城県における市町村別の海水浴客数の推移

注１）2004年に日立市と十王町が合併したため，旧十王町の数値は日立市に含めた．
注２）鉾田町と大洋村は2005年に鉾田市に合併した．
注３）神栖町と波崎町は2005年に神栖市に合併した．

（茨城県観光客動態調査報告により作成）

第６図　大洗町における観光入込客数と県全体に占める割合の推移

注１）2001年度と2003年度はデータ欠損．
注２）2010年度までは年度単位，2011年以降は年単位での集計である．

（茨城県観光客動態調査報告により作成）

写真３　大洗リゾートアウトレット

2006年に開業した当施設は洋風の２階建てで，服飾，雑貨，飲食など47店が入居し，1,500台の無料駐車場を設置している．

（2014年10月　渡邊撮影）

れた．2008年には北関東自動車道の茨城県－栃木県間が，2011年に茨城県－群馬県間がそれぞれ開通した．

以上のように，再編期においては海水浴客が減少傾向にある一方で，観光目的が増加してきた．また，宿泊者数が減少し，日帰りの観光行動が進展してきた．

Ⅲ　大洗町におけるマスツーリズムの受入基盤

Ⅲ－１　宿泊施設

１）宿泊施設の分布変化

第７図は，1980年と2015年における大洗町に立地する宿泊施設の分布を示したものである．大洗町民宿組合提供の「昭和55年度民宿消防用設備設置済施設一覧表」によると，1980年の時点で民宿は104軒存在し，祝町，磯浜町を中心に町内の海岸沿いに広く分布している[5]．2015年にはホテル・旅館が24軒，民宿が25軒，保養所２軒の計51軒が存在し，1980年に比べ，民宿数が大きく減少した．このうち，大洗旅館組合に23軒，大洗町民宿組合に18軒の宿泊施設が加盟している．1980年以前から立地している民宿は，全体的に住宅を改装した小規模なものが占めている．

第７図　大洗町における宿泊施設の分布

注）ａの図では，ホテル，旅館，保養所のデータが得られなかったため，民宿のみを示した．

（現地調査，大洗町民宿組合提供資料，ゼンリン住宅地図により作成）

2000年代以降に開業した民宿の中には，夏季の海水浴客の利用を想定して，大貫町の海岸沿いに立地したものもある．また，祝町には1980年代以降建築されたホテルも存在する．

大洗町の観光が発展するとともに，宿泊施設の形態も多様化した．旅館・民宿という家族経営の宿泊施設以外に，ホテル，保養所という形態の宿泊施設がみられるようになった．これは，企業によって経営されている場合が多く，大人数の旅行者の来訪に対応している．

２）宿泊施設の特徴

（1）宿泊施設の経営形態

大洗町では2015年の時点で，51軒の宿泊施設があり，このうち大洗旅館組合に23軒，大洗町民宿組合に18軒の宿泊施設が加盟している．

これらの宿泊施設の経営形態を明らかにするため，2015年５月に質問紙を用いて直接対面で聞き取りを行った．その結果，ホテル４軒，旅館16軒，民宿18軒，保養所４軒の計42軒から回答が得られた．その結果を表したものが第２表と第３表である[6]．

第２表では，宿泊施設をホテル（A），旅館（B），民宿（C），保養所（D）の４つに分類し，個々の経営形態を示した．また，第３表は，第２表と同じ分類，番号を用いて宿泊施設宿泊者の利用形態を表している．

①ホテル（A；宿泊施設番号１～４）

開業は主に昭和初期～中期で，Ⅱ章で示した黎明期から導入期の時期に相当する．

第２表　大洗町における宿泊施設の経営形態（2015年）

分類	宿泊施設番号	所属	開業年	部屋数	収容定員	営業期間	温泉	所有形態 土地	所有形態 建物	所有形態 職住	宿泊業従事者数（人） 家族	宿泊業従事者数（人） 正社員	宿泊業従事者数（人） パート	宿泊業従事者数（人） アルバイト	家族構成 ～15歳	家族構成 15～19歳	家族構成 20歳代	家族構成 30歳代	家族構成 40歳代	家族構成 50歳代	家族構成 60歳代	家族構成 70歳代	家族構成 80歳以上	継承状況 先代	継承状況 継承年	継承状況 代目	継承状況 後継者
A（ホテル）	1	旅	1901	103	450	通		2	2	2	0	125	37	0	*	*	*	*	*	*	*	*	*	－	－	－	－
	2	旅	1951	48	220	通		1	2	2	0	25	20	0	*	*	*	*	*	*	*	*	*	父	－	3	有
	3	旅	1961	45	150	通		1	1	2	0	27	21	0	*	*	*	*	*	*	*	*	*	－	－	－	－
	4	旅	2003	12	52	通	○	1	1	1	3	0	5	0				●			●○			－	－	－	－
B（旅館）	5	旅	1935	12	40	通		1	1	1	3	0	0	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	父	－	3	有
	6	旅	1865	10	34	通		1, 3	－	－	0	4	0	4	*	*	*	*	*	*	*	*	*	非血縁	1980	－	無
	7	旅	1881	8	34	通		1, 3	1	1	2	3	25	0	×				●	○				妻の父	2010	6	未定
	8	旅	江戸弘化	11	30	通	○	1, 3	1	1	3	0	0	5～6					●			●○		父	－	5	有
	9	旅	1903年頃	8	30	通		1	1	1	2	0	2～3	0							●○			父	1985頃	4	未定
	10	旅	1887年頃	8	30	通		1	1	1	2	0	4	3				●			○		△	父	2008	6	無
	11	旅	1915年頃	7	25	通		－	－	－	0	0	0	0				▲					○	父	1971	5	有
	12	旅	昭和20年代	5	25	通		1	－	1	2	0	2～3	0					●			●△		父	1970年代	2	有
	13	旅	1967	7	20	通		1	1	1	3	0	0	2			○	×			●○			父	1967	3	無
	14	旅	1962	7	20	通	○	1	1	1	3	0	0	2～3					●					父	－	2	有
	15	旅	昭和40年代	6	20	通		2	1	2	2	0	0	0				▲△			Ω		○	夫の親	1979	2	無
	16	旅	1966	5	20	通		1	1	1	2	0	1	0	×××			▲△			●Ω			伯父	1976	2	無
	17	旅	1963	5	17	通		1	1	1	2	0	2	0							●Ω			夫の父	1973	2	無
	18	旅	2003	5	15	通	○	1	1	2	3	0	1	1			●			●○				妻の父	2004	1	未定
	19	旅	明治初期	6	10	通		1	1	1	1	0	0	0						▲△△			○	母	1960	6	無
C（民宿）	20	民	1973	15	50	通		1	1	1	4	0	0	2			●			●○			●	母	－	2	未定
	21	民	1973	12	42	通		1	1	1	5	0	0	2	×				○	○●			●○	なし	－	1	有
	22	民	1987	12	35	通		1	1	1	3	0	0	0					●					なし	－	1	有
	23	民	1952	8	30	通		1	1	1	2	0	0	0			×					●Ω		父	－	8	無
	24	民	1970	6	30	通		1	1	1	2	0	0	0								●Ω		父	1981	2	無
	25	民	1972	9	28	通		1	1	2	3	0	1	1			●			●○				妻の父	2005	2	有
	26	無	2011	7	26	季		1	1	1	2	0	0	1～2			△△			●○				なし	－	1	未定
	27	民	－	5	25	通		1	1	1	3	0	2	0				●Ω		Ω				－	1980	3	有
	28	民	1973	5	20	通		1	1	2	3	0	0	0	－	－	－	－	－	－	－	－	－	母	2006	2	無
	29	民	1965年以前	3	20	通		1	1	1	1	0	0	0						▲			○	父	－	－	無
	30	民	1989	6	18	通		1	1	1	2	0	0	0						●○				父	2010	2	無
	31	民	1970年頃	3	16	通		1	1	1	2	0	0	1									●○	なし	－	1	無
	32	民	1980年頃	5	13	通		1	1	1	2	0	0	0							●○			なし	－	1	無
	33	民	1975年以前	10	－	通		1	1	1	2	0	2～3	0	－	－	－	－	－	－	－	－	－	父	2003	2	無
	34	民	1973	2	－	通		1	1	1	1	0	0	0	－	－	－	－	－	－	－	－	－	なし	－	1	無
D（保養所）	35	旅	1969	52	181	通	○	2	2	2	0	8	0	54	*	*	*	*	*	*	*	*	*	－	－	－	－
	36	旅	2002	31	109	通	○	2	2	2	0	30	30	0	*	*	*	*	*	*	*	*	*	なし	2002	－	－
	37	旅	1994	28	86	通	○	2	2	2	0	12	30	0	*	*	*	*	*	*	*	*	*	－	2012	－	未定
	38	無	1985	12	56	通		2	2	2	0	6	4	2～3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	－	－	－	－

注１）「所属」：旅…大洗旅館組合，民…大洗町民宿組合，無…所属無し
注２）「営業期間」：通…通年営業，季…季節営業（夏季のみ）
注３）「所有」土地：１…自己所有，２…会社所有，３…借地
注４）「所有」建物：１…自己所有，２…会社所有，３…借家
注５）「所有」職住：１…職住一体，２…別居住
注６）「－」は不明を表す．
注７）「＊」は企業また組合による経営のためデータなし．

×…非同居　●…宿泊業従事（男性）　▲…宿泊業非従事（男性）
下線…年齢不詳　○…宿泊業従事（女性）　△…宿泊業非従事（女性）

（聞き取り，宿泊施設提供資料，大洗町商工観光課提供資料より作成）

部屋数，最大収容人数，従業員数が突出して多い．宿泊目的は，大洗水族館やめんたいパーク大洗などの町内施設の観光施設への訪問，海鮮料理や名物のアンコウを使用した料理，海水浴があげられるほか，協議会や組合などの社外会議を行うための会合，忘新年会，歓送迎会といった企業や団体が主催する行事である．個人客としては，家族連れや高齢者が多い．彼らの宿泊目的は，海水浴や町内施設への来訪が多い．

出発地は茨城県が最も多く，次いで東京都である．なお，予約手段は直接電話する場合が多く，他にじゃらんや楽天トラベルのようなネットエージェントの利用や旅行会社を介した予約方法もとられる．このように集客チャネルが多いのは，施設の規模が大きいことを背景に，個人客の需要に加え，会合やバスツアー，社員旅行など団体客の需要があり，多様な客層を受け入れられることに寄与する．

②旅館（B；宿泊施設番号５～19）

江戸時代から昭和中期にかけて開業している旅館がほとんどであり，宿泊施設番号６以外は家族経営である．部屋数は５～12部屋で，最大収容人数は10～40人である．

旅館の経営者は60歳代以上が多く，その子世代が手伝うパターンが多い（宿泊施設番号８，12，13，14，18）．後継者がいる旅館は15軒中６軒である．後継者がいない主な理由は，子世代が他職に就業し，他出することによる．

来訪者の観光目的は，海水浴のほか，大洗水族館，めんたいパーク大洗などの町内観光施設，国営ひたちなか海浜公園，偕楽園など町外の観光地への訪問，食があげられる．とくに，海水浴目的の利用者割合が50％を超える宿泊施設もあり（宿泊施設番号15），海水浴客が重要な顧客となっている．ビジネス目的の宿泊者もおり，原研などの事業所へ出張で訪れる者や，フェリーでの船長な

第３表　大洗町の宿泊施設における宿泊者の利用形態（2015年）

分類	番号	所属	宿泊目的 1位	宿泊目的 2位	宿泊目的 3位
A（ホテル）	1	旅	食	海	-
	2	旅	内	海	ガ
	3	旅	内	社	-
	4	旅	-	-	-
B（旅館）	5	旅	ビ	ガ	外
	6	旅	海	-	-
	7	旅	保	外	-
	8	旅	外	食	-
	9	旅	団	社	食
	10	旅	ガ	食	外
	11	旅	海	社	外
	12	旅	海	食	ガ
	13	旅	ビ	海	-
	14	旅	海	内	-
	15	旅	海	内	外
	16	旅	内	外	-
	17	旅	海・食	内	-
	18	旅	内	社・団	-
	19	旅	ガ	-	-
C（民宿）	20	民	海	社	-
	21	民	食	宴	-
	22	民	海	団	社
	23	民	内	-	-
	24	民	海	社	-
	25	民	内	社・団	-
	26	無	海	サ	ビ
	27	民	海・音	ガ	外
	28	民	食	海	-
	29	民	海	外	内
	30	民	ガ	内	外
	31	民	食	外	海・ガ
	32	民	海	内	団
	33	民	ガ	海	外
	34	民	外	ガ	-
D（保養所）	35	旅	内	-	-
	36	旅	食	社	海
	37	旅	宴	団	社
	38	無	宴	外	海

注１）旅…大洗町旅館組合，民…大洗町民宿組合，無…所属無し
注２）海…海水浴，ガ…ガールズ＆パンツァー，内…町内施設（大洗水族館など）訪問，外…町外施設（ひたちなか海浜公園など）訪問，団…学校行事・敬老会，社…企業主催行事，食…料理，宴…宴会，保…保養，サ…サーフィン，ビ…ビジネス利用，音…野外音楽祭（町外）
注３）帯グラフ部分において空欄は不明であることを示す．

（聞き取りおよび宿泊施設提供資料により作成）

どの資格取得目的の者が含まれる．

宿泊者の出発地は，埼玉県，群馬県，栃木県，東京都である．北関東内陸県からの宿泊者が多い．

③民宿（C；宿泊施設番号20～35）

民宿は16軒中８軒が1970年代の開業である．部屋数は２～15，最大収容人数は13～50人であり，小規模で家族経営が特徴である．

経営者は50歳代以上が多い．後継者がいる民宿

は16軒中４軒であり，残りの12軒は後継者がいないまたは未定である．これは，宿泊者が減少したことによる経営不振と，子世代が他出し，後継者が確保できないことによる．宿泊目的は海水浴が15軒中14軒と大半を占めている．また，年間の宿泊者のうち海水浴客の割合が50％を超える宿も４軒存在し，海水浴に伴う宿泊需要が大きいといえる（宿泊施設番号20，22，26，33）．

また，料理を目的とした利用も目立つ．ここでの料理とは，魚介を使用した海鮮料理やアンコウ料理を指す．とくに冬季に提供されるアンコウ鍋[7)]は冬季の重要な観光目的となっている．

宿泊者の出発地は関東地方とその近県に広がっており，とくに群馬県，埼玉県など北関東からの利用が多い点が特徴である．予約手段については宿泊施設への電話が12軒中11軒にみられ，電話が主な予約手段である．

大洗町が2012年放映のアニメ「ガールズ＆パンツァー」の舞台の一つとして描かれたことで，そのファンが作品で描かれた場所をめぐる「聖地巡礼」と呼ばれる観光形態が発展している．こうした観光者が主な顧客となっている宿泊施設がある．彼らの出発地は，第８図のａのように東京都など大都市圏を中心に全国に及ぶ．

④保養所（Ｄ；宿泊施設番号36～39）

開業年は①～③で示した宿泊施設より新しく，1980年代以降であることが多い．茨城県など地方公務員を対象とした保養所が主であるため宿泊者の出発地は茨城県内が半数以上を占める．一般の利用者も宿泊できる．

ホテルと同じく，収容定員が大きく，団体の受け入れに対応している．また，予約手段も電話がほとんどである．主要な宿泊目的は，忘新年会時期の宴会や社員旅行などである．大貫町にある保養所では，大洗サンビーチへの近接性から夏季には一般客を中心に海水浴目的の利用者が訪れる．

(2) 宿泊施設の個別事例

①ホテル（宿泊施設番号１）

宿泊施設番号１は1901（明治34）年に開業した（蓼沼，2007）．1973年と1974年，また筑波万博を見込んで1985年に建て替えが行われた．その後，老朽化が進行し2009年と2011年には内装のリニューアルを行った．

個人客の場合，アンコウなど季節料理や海水浴目的が多い．団体客は，会議，宿泊，宴会などの企業主催行事や宴会での利用が中心で，組合や協議会の社外会議・会合を行う．忘新年会，歓送迎会などで利用する団体は毎年ほぼ同じである．社員旅行は少人数化する傾向がある一方，団体の需要が根強い．宿泊プランの多様化，団体客専属営業を行うなどして集客に力を入れている．

集客圏については，団体の利用が多い茨城県をはじめ主に関東地方が多いが，その他に福島県，長野県などもある（第８図のｂ）．聞き取りより，茨城県においては，団体は水戸市からの来訪が中心であり，個人は県西，県南からが多い特徴があるという．

②旅館（宿泊施設番号６）

宿泊施設番号６は1865（慶応１）年に料理店として開業した．その後，1870（明治３）年から旅館を兼業するようになった（蓼沼，2007）．

常時４人で営業しているが，繁忙期には近所の人やシルバー人材センターなどからパート従業員を雇用している．

宿泊目的は夏季の海水浴と冬季のアンコウ料理が中心である．アンコウ料理は，アンコウ鍋のほか供酢（ともす）という郷土料理も提供している．

集客圏は，第８図のｃをみると，関東地方では茨城県が129人と最多で，茨城県以外の北関東が317人（群馬県84人，栃木県77人，埼玉県156人），南関東が136人（東京都56人，千葉県58人，神奈川県22人）で，福島県46人，青森県９人，山形県８人と続く．季節別では，夏季の宿泊者の割合が多いのは群馬県44人（52％），埼玉県118人（76％），東京都29人（52％），神奈川県11人（50％）であ

第８図　大洗町のホテル・旅館における宿泊者数分布の事例

（各宿泊施設提供資料により作成）

り，冬季は東京都20人（36％），千葉県18人（31％）となっている．

また，市区町村別でみると，茨城県内ほか埼玉県東部，栃木県南部，群馬県東部，福島県から宿泊者が訪れる（第９図）[8]．夏季はこれらの地域から宿泊者が訪れる一方で冬季は東京都，千葉県，群馬県，また大洗町近隣の水戸市，鉾田市，東海村などからも訪れる．季節によって集客圏の差異がみられる．この特徴は，大洗町北隣にあるひたちなか市阿字ヶ浦・磯崎地区の旅館の集客圏を1990年代末に調査した松本ほか（2000）と極めて類似しており，また15年以上を経た現在でも変化

第９図　宿泊施設番号６の市区町村別宿泊者数分布（2013年）

（宿泊施設番号６の宿泊台帳により作成）

していない傾向である．

③民宿（宿泊施設番号21）

宿泊施設番号21の経営者は，海水浴客の増加による宿泊需要の増大に伴い，1973年に現在の民宿を開業した．当時の初期投資は200～400万円であったが，1973年の石油危機以後，２倍以上に高騰したという．開業時の宿泊料金は１泊２食2,000円であったが，加盟する大洗民宿組合全体で毎年数百円ずつ値上げしていった．開業から現在まで

４回の増改築を経ている．

料理，宴会が目的の宿泊者が多く，アンコウ鍋が売りである．1990年頃より刺身や天ぷら，酢の物などのアンコウ料理の提供を開始した．その後，1992年11月頃にテレビ中継でこの民宿のアンコウ料理が紹介されたことで，これを目的に来訪する宿泊者が増えたという．また，毎年宴会のため利用する企業もある．

宿泊者は茨城県，群馬県，埼玉県東部，神奈川県からが多い．北関東道開通以前は宇都宮市を中心とした栃木県から来訪する宿泊者が多かったが，日帰り客が増加し，宿泊者が減少したという．

予約手段は電話かネットエージェントがよく利用される．ネットエージェントへの対応は，後継ぎでもある経営者の娘が行っている．

④保養所（宿泊施設番号38）

宿泊施設番号38は1994年に開業した公務員向けの保養所である．宿泊客の内訳は，公務員と一般客が約50％ずつである．

宿泊目的は宴会，企業主催行事が多い．主要な客層は茨城県職員で，一般客としては老人会などの高齢者の団体，水戸市などにある自動車ディーラーである．高齢者の団体は小中高校時代の同窓会目的での利用が多く，県央，県北地区を筆頭に茨城県内全域から利用者が訪れる．また，子連れの家族のほとんどは，土曜日に来訪して海水浴をして宿泊し，翌日日曜日にこの宿泊施設で大洗水族館の前売り券を買っていく．

Ⅲ－２　集客施設

１）アクアワールド茨城県大洗水族館

アクアワールド茨城県大洗水族館（以下，大洗水族館）の歴史は1952年に開館した「県立大洗水族館」にさかのぼる．この建物は現在よりも数百メートル南側に立地し，竜宮城をモチーフにした門といけす形式のコンクリート製のプールを有していた．戦後７年目という全国的にも早く開館し，生きている魚を見る機会が限られていた当時は画期的な施設であった[9]．博物館に相当する施設であることから，筑波山とともに茨城県の小学校の遠足の目的地として指向されるようになった．1970年９月に延べ260万人の来館を記録したのち，増築のため一時閉館した．

1970年11月には２代目にあたる「海の子供の国大洗水族館」が現在と同じ位置に開館した．これには屋外プールが併設され，1981年にはイルカショープールが屋内[10]に増設された．また，世界初のペンギンショー導入や，魚の輪くぐり，ピラニアの餌やりなどの生態展示が行われるなど，先進的な取り組みを行うようになった．高度経済成長と共に増設，展示内容の工夫がなされ，茨城県内やその周辺県の学校遠足目的地としての性格は維持されたが，2001年に老朽化で一時閉館した．

現在の大洗水族館は2002年に３代目として開館し，建物の延床面積は約19,800㎡，地上５階建てに及ぶ（写真４）[11]．展示水槽数は60，総水量約5,100tの展示施設を備え，全国で最も多い50種のサメが飼育・展示されている．一般乗用車750台，大型バス80台が収容可能な駐車場や大型バスが停車可能なロータリー付きの玄関を有し，団体客の来場に対応している．2014年度は約115万人が来場した．

また，1990年前後の水族館ブーム[12]の影響に加え，遠足で訪れた子どもが親となって来館するこ

写真４　アクアワールド茨城県大洗水族館

現在の建物は2002年より使用されており，普通自動車750台，大型バス80台が収容可能な駐車場が設けられている．

（2015年５月　阿部撮影）

ともあり，大人向けの展示も増やした．

遠足を中心とした団体客の来訪のために，大洗水族館は茨城県，栃木県を中心に近県の教育委員会を通じた誘客活動を行っている．こうした取り組みの結果，少子化による遠足需要の減少などの課題が存在するものの，遠足の目的地としての需要は根強くある．団体で集まって弁当を食べる場所や大人数で集合できる場所もある．

第10図は，大洗水族館に駐車された自動車のナンバープレート登録地を示したものである．これにより，自動車での来訪者が多い大洗水族館の集客圏を示すことができる．茨城県や栃木県，群馬県，埼玉県，千葉県が多い点が特徴である．埼玉県と千葉県については，常磐道沿線にあたる地域である埼玉県南東部と千葉県北西部からの来訪者が多い．一方，東京都や神奈川県からは来場者が比較的少ない．このことから大洗水族館の集客圏は主に茨城県や関東地方の内陸県だといえる．2011年に北関東自動車道が全通したことにより，栃木県，群馬県からの来場者が増加している[13]．

第11図には，ナンバープレート登録地別の来場者の分布を2014年度の各月について示した．春から夏にかけて来場者が多く，秋，冬は少ない．また，春休み，夏休みなど学校の長期休暇期や祝日は群馬県，栃木県，埼玉県からの来訪者が増加する傾向がある．茨城県からの来訪者はすべての月で最も多い．東京都，神奈川県からの来訪者は年間を通して少ない．

以上のように，大洗水族館は大型水族館であることを背景に，茨城県随一の集客施設として機能している．

第10図　大洗水族館駐車場におけるナンバープレート登録地別駐車台数

注）調査日は2014年８月14日（木）である．

（アクアワールド茨城県大洗水族館提供資料により作成）

２）ゴルフ場

(1) ゴルフ場Ａ

ゴルフ場Ａは1953年に開場し，株主会員制をとっている．新規会員になるには，原則として会

第11図　大洗水族館駐車場における月別都県別駐車台数（2014年４月～2015年３月）

注）原則各月第４日曜日に調査．12月27日のみ土曜日．11月23日は３連休中日．

（アクアワールド茨城県大洗水族館提供資料により作成）

員の紹介を要し，年６回開催される理事会で承認され，会員権を購入する必要がある．

海水浴だけでなく，年間を通した集客が可能な観光資源の創出を目指した友末洋治茨城県知事により，第二次世界大戦後の混乱で荒れ果てた松林の保全と地域振興を担う新たな観光資源として建設された．こうした開業の背景に加え，全敷地が公有地（県28.6%，町71.4%）であることから，民間企業ではあるが公の性格を有するゴルフ場である．そのため，株主会員制に基づくメンバーによるクラブ運営を積極的に志向しつつ，クラブの在り方として茨城県や大洗町の催事などにも積極的に協力するなど地域社会との関係を重視し，とくに地元である大洗町との共存共栄を標榜している．

茨城県内初のいわゆるチャンピオンコースであり，マツの木や自然を生かしたコース設計が売りである．プロ・アマチュア問わず年間60回ある競技会･トーナメント開催時には,参加選手やスタッフだけでなく，300人ほどの大会運営ボランティアや観客約２万人も会場に訪れる．そのため，大勢の宿泊者を受け入れる需要が発生し，トーナメント開催期間中，大洗町の宿泊施設を中心に，宿泊需要が高まる．

第12図にはゴルフ場Ａの集客圏を会員（メンバー）と非会員（ビジター）に分けて示した．これによれば，メンバーの来訪は茨城県からが最も多いことがわかる．メンバーは水戸市在住者が多い．来訪者は主に春（４～６月），秋（10～11月）に多く，これは年間通じて比較的温暖な気候であること，また気象的に晴天が多く，降雪が少ないことに起因する．また夏季に関しては，海風が吹くため，比較的涼しいことが集客に作用しているという．

第12図　ゴルフ場Aの集客圏（2014年）

（ゴルフ場A提供資料より作成）

利用者の行動パターンとしては，土曜日に宿泊し，日曜日にプレーして帰るという１泊２日の形態が多い．両日プレーする人は少なく，連泊する人も少ない．また，接待利用は土曜が多く，日曜はメンバーの利用が多い．

(2) ゴルフ場Ｂ

ゴルフ場Ｂは全国展開しているゴルフクラブの全17コースの一つで，2001年に開業した．共通会員制を採用しており，必要な費用を払い正会員に認定されれば，全国17コースおよび海外提携コースが利用できる．

利用者は50歳以上の男性が多い．これは，若いころから接待ゴルフの経験がある年齢層が今でもゴルフを趣味としているためとゴルフ場Ｂの支配人は考えている．

通常，ゴルフ場は紹介や電話での予約が常であるが，このゴルフ場ではインターネットを利用した予約が可能である．その割合は30%を占め，新規顧客獲得に生かされている．

利用者の行動パターンとしては，男性数人のグループ，女性のグループ，企業などによる団体に分けられる．男性数人のグループは土曜から日曜を利用して来訪し，両日プレーする．宿泊はシングルが好まれるため，大洗町内のホテルや民宿ではニーズを満たせず，水戸市内のビジネスホテルなどが利用される．一方，女性のグループは日帰りでの利用が多い．

また，企業による団体利用もみられ，社員旅行など団体で来訪し，その団体の一部の者だけがプレーする場合と，忘年会などのイベントと兼ねて

行われる場合がみられる．

第13図に，ゴルフ場Ｂにおける季節別・地域別来場者数推移を表した．通年での来訪がみられ，来訪者が最も多い季節は秋季，次いで春季である．出発地は，茨城県が多く，次いで東京都である．2011年の北関東道の全通により，群馬県からの利用者が増加したという．

格式が高いゴルフ場の存在は，大洗町の観光地域としての価値を高めていると考えられる．

３）茨城港大洗港区に立地する諸施設

(1) めんたいパーク大洗

めんたいパーク大洗を運営する株式会社かねふくは1971年に福岡県で創業した．その後，関東以北への進出を計画し，1979年に株式会社東京かねふくを設立した．この会社の設立当初は，関東以北への商品配送は福岡県の自社工場から行っていたが，鮮度の問題などにより，関東地方における工場の建設が検討され，大洗町五反田に1990年に大洗工場が建設された．大洗町に工場を設立したのは，水産施設が多く，水産関連の知識を持った人材が多いことを，先代会長が大洗町出身の知人に勧められたからである．

当初この工場は生産機能に特化し，商品の販売は行っていなかった．しかし，近隣住民からの販売や工場見学の要望や，食の安全への社会的な関心の高まり，既存の大洗工場の老朽化などを受け，見学工場と直売所を併設した観光施設「めんたいパーク大洗」が2009年に大洗港区第２埠頭に建設された（写真５）．2014年現在の従業員は140人で，細かい手作業を要するため女性が多い．従業員の大部分は大洗町やひたちなか市，鉾田市，水戸市から通勤している．

めんたいパーク大洗を訪れる観光者は個人客のみならず，団体のツアーも多い．2014年現在，10社の旅行会社と契約を結んでいる．東京のほか，2011年に北関東道が全通したこともあり，埼玉県や群馬県からの来訪が多い．

(2) 茨城県大洗マリーナ

茨城県大洗マリーナは，主に船舶の保管や修理，給油などのサービスを行っている茨城県営の施設である．バブル期にマリーナが全国的に不足し，不法係留が問題化したことから国が放置艇対策に乗り出し，公設のマリーナを設置する動きがあった．このような背景があり，このマリーナは県営施設として設置された．

2014年現在，このマリーナを保管場所にしている船は約110隻あり，そのうちヨットが３割，ボートが７割を占め，釣りやセーリングのために使用されている．大洗マリーナ完成当時の1992年頃は

第13図　ゴルフ場Bにおける季節別・地域別来場者数推移（2010～2014年）

注）冬は1月～2月と12月，春は3月～5月，夏は6月～8月，秋は9月～11月を示す．

（ゴルフ場B提供資料により作成）

写真５　めんたいパーク大洗

明太子の見学工場と直売所を併設した施設である．普通自動車120台，大型バス12台が駐車可能である．

（2015年５月　松原撮影）

約120隻であり，艇数は半々であった．

都府県別の利用者数は，2014年11月現在，茨城県からが約６割の61人と最も多く，次いで東京都が13人，埼玉県が９人，栃木県が７人などとなっている（第14図）．大阪府や兵庫県，愛知県から来訪する利用者の船もここに停泊している．

大洗沖は世界有数のカジキ漁場であることから，主に夏にカジキ釣り大会が行われ，とくに８月最終週の休日に行われるビルフィッシュトーナメントには多くの利用者が参加する．カジキは小さいものでも50kg，大きいものでは200kgほどあり，釣った後はマリーナに寄付されることが多い．そのカジキを大洗町のイベントで利用し，魚の解体ショーやカジキ料理の販売など商工感謝祭などでふるまっている．またヨットレースが４月～11月の間，年６回ほど行われている．

Ⅲ－３　海洋資源

ここでの海洋資源とは，海に由来する海浜，水産物，スポーツなどの観光資源を指す．

１）海洋を基盤とするスポーツ

大洗町では，明治期以降，海水浴が重要な観光目的となっているが，海水浴場の位置は時代を経るにつれ南下している．第二次世界大戦前は，現在の大洗水族館付近の砂浜，大洗海岸，平太郎浜が利用されていたが，1960年代後以降は，磯浜港西側の築港（ちくこう）という地区に「磯浜海水浴場」が開設され，こちらがメインの海水浴場となった．さらに大洗港の埋め立てが進行すると，現在の大洗サンビーチがメインの海水浴場となった[14]．現在は，大洗サンビーチ，大洗海岸，平太郎浜海水浴場の３つの海水浴場が存在する．大洗サンビーチの砂浜は東西約350m，南北約１kmと広大である．このため，砂浜には複数の海の家やビーチバレー場，バーベキュー場などの専用区画が設定されている．

第14図　大洗マリーナの利用者の居住地分布（2014年）

（大洗マリーナ提供資料により作成）

海水浴客の出発地は，北関東を中心に関東地方一円に広がる（第15図）．常磐道と北関東道の沿線地域からの来訪が多く，遊泳可能な海水浴場がある千葉県や神奈川県の海岸沿いの地域からの来訪者は少ない．

また，1990年代後半以降，大洗サンビーチと大洗海岸はサーフィンの好適地として指向されるようになった．1990年代までサーフィンの適地はひたちなか市の阿字ヶ浦海岸であった．2000年代になると，大洗町にサーフィンの場が移行し始めた．それは，阿字ヶ浦海岸の北に常陸那珂港が建設されたことで，堆積する砂が減少して水深が深くなったことで，サーフ可能な波が発生しにくくなったためである[15]．これを示すように，サーフショップは，1990年代には阿字ヶ浦に６軒，大洗町に１軒あったが，現在は大洗町に４軒立地している．

大洗サンビーチは，初心者向きで，駐車場があり，砂浜が広く，子どもから年配の方までサーフィンができる．サーフ可能な高さの波ができる場所をゲレンデと呼ぶ．初心者向きのゲレンデは関東地方では数が限られている．風向もゲレンデをつくる条件である．大洗町では北風時にサーフに適した形の波が発生する．北風時にサーフに適した波形になるゲレンデは，茨城県では大洗町のみであるため，北風時はとくに大洗町以南の茨城県からのサーファーが集中することがある．北風が吹きやすいのは秋から冬にかけてである．一方，夏は南風が中心であり，茨城県内では南風で波が立

a) 2014 年 8 月 12 日 (火)　午前 10 時 0 分

b) 2014 年 8 月 16 日 (日)　午前 10 時 30 分

第15図　大洗サンビーチ隣接駐車場におけるナンバープレート登録地別駐車台数

注１）駐車台数に二輪車は含まれていない．
注２）調査時の気象状況は下記のとおりである．
　a）天気：雨・曇り，最高28.3℃，最低23.2℃
　b）天気：雨・曇り，最高24.7℃，最低21.2℃

（大洗町商工観光課提供資料により作成）

つゲレンデも多いため，各地にサーファーが分散する傾向にある[15]．

また，大洗海岸は波が高く，海水浴場としてはあまり利用されていなかったが，波が高いということと，海水浴客が少ないという理由から，中・上級者に好まれ，大会も開かれている．ISUカップという2015年で20回目となるプロサーファーの全国大会，茨城県内のサーフショップ約40店が合同で開催する大会も大洗町で開催されている．

このように，サーフィンを行う場所が限定されていることや，自動車での交通利便性から，とくに日曜日の朝は，大洗サンビーチはサーファーで混雑する[16]．

２）水産物による食の商品化

水産物もまた重要な観光資源である．大洗町では1970年代から，アンコウ鍋や供酢などのアンコウ料理を提供する飲食店や宿泊施設が存在した．しかし，アンコウは大洗町で捕獲されても市場に流通することは少なく，一部の漁師が自家用に消費する程度であった．

大洗町では1980年代後半以降，冬季を中心にアンコウ料理を目的に訪れる観光者がみられるようになった．市川ほか（2015）によれば，北茨城市平潟町では，1990年代のグルメブームの際，テレビや雑誌，新聞などのメディアでの紹介によって，アンコウ料理への需要が急速に高まったという．大洗町でも1992年に日本テレビ系の昼の情報番組において，民宿でアンコウをさばく様子が中継され，大きな反響があった．アンコウは11月～３月が旬とされているが，観光者にアンコウ料理を提供し始めた当初は，このことに気づかず，この時期以外にも提供していた．徐々に冬がアンコウの旬だと気づくようになったという[17]．

現在は，冬季に宿泊や忘新年会を兼ねてアンコウ料理を食べるために来訪する観光者が多く，アンコウは来訪者が少なかった冬季の重要な観光資源である．大洗町の商工会などでは，アンコウのさばき方の講習会を開催するなど調理方法を普及させている．このように，大洗町におけるアンコウ料理は郷土料理ではあるが，観光者によって発見された料理としての側面があるといえる．また，冬季のアンコウ料理を目的とした来訪者は宿泊施

設の閑散期の経営に寄与している．

また，特産の生シラスや寿司を提供する飲食店が大洗港区東側に集積している．2010年に開業した大洗町漁協直営の飲食店「かあちゃんの店」は人気を博し，休日には長い行列がみられる．2014年にはこの店の別館も開業した．この至近の回転すし店や海鮮料理店も休日には混雑する．食に対する観光需要の高まりを受け，大洗観光協会と大洗民宿組合は共同で「大洗の四季・常陸鍋シリーズ」をはじめとする季節ごとに異なる食事を宿泊施設で提供する事業を行っている．

以上のような海の存在を前提とする観光資源は，海浜観光地域としての大洗町の魅力を増大させた．また，アンコウ料理の導入は，近年注目を集める食による観光まちづくりの成功例ともいえよう．

Ⅳ　大洗町における海浜観光地域の継続的発展要因

Ⅳ－１　旅行目的とその多様化

本節では，Ⅱ章で示した時代区分に基づいて，各期の旅行目的の特徴を述べる（第４表）．

１）黎明期

黎明期においては，潮湯治や海水浴，大洗磯前神社への参詣などの観光がみられ，これらは磯という自然条件を利用することにより成立した．海水浴の発展には水浜電車の開通による水戸市からの交通条件の改善が寄与した．また，海水浴旅館の存在は，後の海水浴と宿泊というマスツーリズムを実現するビジネスモデルの原初形態となった．

２）導入期

導入期においては，民間資本と公共セクターによって，発展期以降のマスツーリズムの基盤が形成され，観光業への産業構造の変化が促された．

潮湯治に代わり海水浴が大衆化してから，民間資本によって，ホテル，保養所など企業による宿泊施設の供給が進み，マスツーリズムを受容する基盤が成立した．行政は知事を筆頭に，県立自然公園の指定，水族館とゴルフ場の建設によって，大洗町の観光開発を行い，観光の通年化が促進された．とくに「県立大洗水族館」の開業は，海水浴と並ぶ大洗町のイメージを形成した．このようにして，海水浴に依存していた大洗町に，通年で

第４表　大洗町への主要な旅行目的とその変化

	黎明期	導入期	発展期	再編期
旅行目的	潮湯治			
	遊郭			
	別荘滞在			
	海水浴 →	→	→	→
	保養 →	→	→	→
	大洗磯前神社への参詣 →	→	→	→
		水族館 →	→	→
		コンベンション・慰安旅行 →	→	→
		ゴルフ →	→	→
		遠足 →	→	→
		研修（学芸員資格取得） →	→	→
		出張（工事や原研訪問） →	→	→
			サーフィン →	→
			研修（フェリー乗船実習） →	→
				ショッピング
				食
				アニメ聖地巡礼

（聞き取りにより作成）

の観光目的が追加された.

3）発展期

発展期は，大洗町におけるマスツーリズムが進展し，大勢の観光者を受け入れる海浜観光地域としての地位を確立した時期である.

1960年代後半の全国的なレジャーブームが波及し，大洗町は1970～1990年頃に海水浴ブームを迎えた．海水浴とその前後の宿泊が海浜観光地域に対して社会的に広く求められた大洗町は，ホテルや旅館，約140軒にも及ぶ民宿，また広く遊泳可能な砂浜の存在によって対応し，マスツーリズムを受容した．また，1968年以降の高速交通網の発達によって，観光者の出発地が常磐道沿線を中心に拡大した.

4）再編期

1990年代以降, 海浜観光地域としての大洗町は，海水浴客の減少を迎えるものの，その減少に対応することができた．海浜観光資源に依存していた大洗町の観光が持続したのは，海水浴以外の多様な旅行目的を生み出し続けてきたためである．例えば，複数の集客施設，サーフィン，アンコウなどの食などがあげられる．集客施設は，多くの観光者が来訪するという意味で，マスツーリズムを継続させているといえる.

海浜を利用した観光として海水浴以外にも，サーフィンが観光目的化した. サーファーは季節，天候，曜日を問わず来訪する特徴があるが，海水浴客とは異なり，宿泊など町内での経済的消費が少ない．しかし，大会の開催などでそれを克服する動きもみられる.

大洗町における旅行目的は，海水浴など自然条件で実施可能な形態を基盤としつつ，港湾や観光関連施設の整備と，再編期における新規需要の発見と受容により多様化した．このため，海浜観光地域として継続的に発展してきたと考えられる.

Ⅳ－2　旅行目的と出発地の関係

大洗町における観光者の旅行目的は，彼らの出発地によって分かれている（第16図）．以下では，その背景について旅行目的ごとに述べる.

1）恒例行事による来訪

ここでいう恒例行事は，企業，団体などによる会合，宴会，パーティーなどのコンベンション，また周年行事や慰安旅行，および学校の遠足などを指す.

コンベンション参加者の出発地は，水戸市など茨城県央地域を中心に，栃木県や埼玉県など茨城県の近県からの来訪もみられ，会合の参加者によっては関東一円に及ぶ．これは，コンベンションが実施可能な宿泊施設との近接性や交通条件が関係していると考えられる.

一方，遠足の出発地は，茨城県，栃木県，千葉県北部，埼玉県で，いずれも常磐道や北関東道の沿線である．これらの地域から最も近い水族館として大洗水族館が選ばれる．茨城県の小学校ではここが遠足の目的地として選ばれることがとくに多く，これは遠足の形態でマスツーリズムを維持していることと結びつく.

第16図　大洗町への旅行目的と出発地の関係
（聞き取りにより作成）

2）海洋資源を目的とした来訪

海水浴やサーフィンを目的とした観光者，および大洗水族館などの集客施設への来訪を目的とした観光者の多くは，子連れの家族や友人，および研修や敬老会などの地域組織である．

彼らの出発地は，北関東４県を中心に関東地方一円に及ぶ．このような分布となるのは，大洗町への近接性と高速道路網が関係するためであると考えられる（第17図）．すなわち，海水浴やサーフィン，水族館への来訪を観光目的とする場合，自動車を利用した場合の近接性を観光者は重視する．そのため，常磐道や北関東道の沿線地域からの観光者が多くなると考えられる．2013年以降，首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の神奈川県区間が開通し，これによる埼玉県から神奈川県へのアクセスが改善された．このため，今後大洗町の集客圏は変化する可能性がある．

一方，近接性以外の指標として，観光資源の魅力が考えられる．遠浅の大洗サンビーチは茨城県最大規模の面積の砂浜を有しており，日本人の海水浴の嗜好とマッチしている．また，海水浴と水族館を近隣で楽しめるという点も，大洗町ならではの特徴であり，大洗町の魅力を高めている．

以上より，大洗町の近接性と交通条件，また観光資源の優位性が，海洋資源を目的とした観光者の出発地を規定していると考えられる．

3）旅行会社のツアーやアニメ聖地巡礼による来訪

旅行会社が催行するバスツアーで来訪する観光者，およびアニメ聖地巡礼を目的とした観光者の出発地は，東京都，埼玉県，神奈川県，千葉県，大阪府など大都市圏が中心であり，大洗町の旅行目的の増加に寄与している．

ツアーの昼食の受け入れには，一部の旅館やホテルが対応している．冬季には旅行会社の依頼に応じてアンコウ料理を提供する旅館もある．宿泊をともなうツアーは，保養を目的とした中高年の参加が多い[18]．

アニメ聖地巡礼を目的とした観光者は，「ガルパンプラン」という専用の宿泊プランを設けている旅館および民宿に宿泊することがある．このプランでは登場人物がデザインされた缶バッジやタオルがプレゼントされる等の特典が受けられる．

第17 図　福島県から伊豆半島にかけての海水浴場の分布（2014 年度）

（各県の水質調査資料，東京都各町村観光協会公式ウェブサイトにより作成）

彼らの出発地は前述のとおり，東京都や横浜市など大都市が中心であるが，他の旅行目的と異なりこのアニメの舞台は大洗町のみであり，競合する目的地が存在しないことから，観光者の出発地は全国に及んでいる．

Ⅳ－３　恒例行事を契機としたリピーターの誕生

大洗町を訪れる観光者の中には，学校や企業，地域組織が主催する恒例行事によって決められた目的地であるために来訪する者が多く存在する．１）学校の遠足や修学旅行，部活動やサークルの合宿，２）企業や地域による忘新年会や慰安旅行などがこれにあたる．

茨城県や栃木県など大洗町に近い学校にとって，大洗町はとくに遠足のための重要な目的地となっている．茨城県の多くの小学校は，大洗町または筑波山が遠足の目的地として指向している．児童にとって思い出として深く心に残る学校外での行事において，大洗町の海や大洗水族館を見学することは，大洗といえば水族館，海という認知を高め，これは海浜観光地域としてのイメージの形成に寄与する．このような幼少期から青年期における経験によって，松村（1992）が指摘するように，「大洗町は海や水族館がある場所」というイメージが児童に形成される．大洗水族館を遠足の目的地としてもらうために，水族館側も茨城県や栃木県の各市町村の教育委員会に対して営業を積極的に行っている．したがって，教育機関と観光施設の双方が大洗町での恒例行事をつくり上げているといえる．団体での来訪の後，再び個人や家族で来訪したり，また親世代，祖父母世代が子供や孫を来訪させたりすることにより，リピーターとなっていく構造も存在する．

校外学習に加え，学校の部活やゼミ，スポーツクラブの合宿を受け入れている民宿もある．指導者同士の人間関係によって口コミで評判が伝わることで新規顧客を獲得している．大洗町での合宿の恒例化が，リピーター化に寄与している．

海水浴期以外には，企業や協議会，組合など地域組織の会議，会合や宴会，ゴルフ接待などの利用者を受け入れている点が特筆される．とくに冬季は忘年会や新年会などが行われ，海水浴期に次ぐ繁忙期となっている．彼らが大洗町を利用する理由として，目的に合う宿泊施設が大洗町に存在することに加え，水戸市には大規模ホテルが少ないことから，団体客を受け入れられる施設を求めて大洗町を指向していると考えられる．またこうした利用者は毎年同じ企業が同じホテルを利用する傾向があり，恒例行事と化している．

このように，遠足などの校外行事で決められた目的地に来訪することによる海浜観光地域というイメージ形成に加え，企業や各種団体の会合，慰安旅行などの恒例行事を毎年同じ宿泊施設で行うことが，リピーターの形成に寄与している．

Ⅴ　おわりに

本稿では，海浜観光地域である茨城県大洗町の継続的な発展要因を，マスツーリズムの発展過程を通時的に分析した上で，現在のホストとゲスト間の需給の結びつきに着目して明らかにした．その結果，以下の点が明らかとなった．

大洗町における観光の展開過程は４つの時期に区分される．潮湯治や保養のための旅行が表れた第二次世界大戦前までの「黎明期」，茨城県による観光開発や地元資本による宿泊施設の開業が進展した第二次世界大戦後から1965年までの「導入期」，民宿など住民の観光業への参画が著しく進展し，海水浴を基盤とするマスツーリズムが成立した1980年代までの「発展期」，旅行目的が多様化してきた現在までの「再編期」である．

遊泳可能な海と広大な砂浜の存在が，海浜観光地域としての発展を規定し，海水浴を基盤としたマスツーリズムを成立させた．1990年代以降の海水浴客の減少には，大洗町は海水浴とそのための宿泊という観光行動に依存することなく，旅行目的を増加させ，観光者の出発地を拡大させたことで対応し，観光地域として再発展を遂げた．すなわち，マスツーリズムの存続は，海浜観光地域としての継続的発展に寄与している．

大洗町におけるマスツーリズムの存続には，個人旅行者だけでなく，団体旅行者のリピーター化が寄与している．彼らは，遠足，ツアー，コンベンションのために，大型の水族館やホテル・旅館など茨城県では数が限られる機能を求めて継続的に大洗町に来訪する．

以上の観光形態を支持しているのは，１）高速道路網を介した海への近接性に優れた大洗町の位置的条件，２）東京と広大で人口が多い関東地方内陸部の後背地としての存在があげられる．これは，観光者の出発地が東京などの大都市一極型であることが多かった先行研究とは異なる形態である．関東地方では限られた観光資源である遊泳可能な海や水族館への近接性と高速道路の分布が，海浜観光地域の後背地を規定している．

大洗町の観光には課題もあり，宿泊需要が減少し，民宿の廃業が相次いでいる．一部の民宿はアンコウ料理などで冬季に多くの宿泊者を獲得しているが，北関東道の開通以降，宿泊者が減少したという宿泊施設経営者の話が頻繁に聞かれた．

大洗町は観光地域としてButler（1980）でいう成熟または停滞の段階に入っていると考えられる．後者の段階にある観光地域は，繰り返し来訪する観光者の存続を強く求めるという．海水浴客，大洗水族館への来訪者などとは異なる新たな観光者を見つけることも必要であろう．そのためには，関東地方よりも大きなスケールで観光者を求めることが今後必要になるであろう．

現地調査に際し，大洗町商工観光課の田山篤様，アクアワールド茨城県大洗水族館普及課の大澤節夫様，黒澤義明様，大洗旅館組合の石井盛志様，大洗町民宿組合の飯田功様をはじめ大洗町の皆様から多大なる御協力を賜りました．また本稿の執筆にあたっては筑波大学生命環境系人文地理学分野の先生方からご指導いただきました．末筆ながら以上を記して感謝いたします．なお，本稿の骨子は2015年10月に行われた第10回中日韓国際地理学会議（於：中国上海市・華東師範大学）にて発表した．

［注］

１）安村（2003）によると，大勢の観光者の来訪という特徴は，マスツーリズムに固有のものではなく，オールタナティヴツーリズムやサステイナブルツーリズムにも所与の特徴である．

２）本稿では，小口（1985）に従い，療養を目的に海水に浴することを「潮湯治」，レジャーを目的に海に入ることを「海水浴」と表記する．

３）都道府県立自然公園とは，各都道府県がそれぞれの条例によって指定し管理を行う，優れた自然の風景地であり（自然公園法２条４項，59条，60条），当該地域では大洗海岸の白砂青松の景観などが含まれている．自然公園は保全と利用を前提とした地域制公園であり，指定による乱開発や自然破壊の抑止，もしくは指定による名勝地域への観光の推進の２点が主な目的とされる（加藤，2008）．茨城県は，公園指定と合わせて水族館やゴルフ場の建設を実施したことから，後者の目的が主眼にあったと考えられる．

４）大洗町では「動燃（どうねん）」と呼ばれている．これは，日本原子力研究開発機構の前身であり，1967年に発足した「動力炉・核燃料開発事業団」に由来する．

５）なお，ホテル，旅館，保養所については，1980年前後の正確な数や分布を示した資料を取得できなかったため，示されていない．

６）なお，旅館１軒，民宿２軒についてはすでに廃業もしくは休業中であるため表中に記載していない．

７）大洗町では「どぶ汁」と呼ばれるアンコウの鍋料理がある．これは，あん肝を空の鍋で煎った後に，アンコウの身や野菜を入れ，それらの水分のみで煮込まれてつくられる．そのため，濁るほど汁が濃く，味が濃厚になる．

８）宿泊者数が10人以上の市町村は以下のとおりである．福島県：二本松市27人，茨城県：小美玉市31人・つくば市26人・水戸市10人，群馬県：前橋市18人・伊勢崎市14人・高崎市13人，栃木県：宇都宮市24人・壬生町12人，埼玉県：越谷市21人・さいたま市13人・宮代町11人・春日部市10人，千葉県：千葉市22人・

柏市11人，神奈川県：横浜市10人.

9）大洗水族館への聞き取りによる.

10）これは冬季の寒さを考慮したもので，千葉県以南の水族館では屋外に設置されていることが多いという.

11）こうした施設の大規模化はバブル経済による好景気，水槽等展示設備の技術向上などが背景となって，日本の水族館全体で起きていた.

12）日本経済新聞2010年８月23日Web版.「水族館、全国にいくつある？」. http://www.nikkei.com/article/DGXNZO13224880R20C10A8ML0000/（最終閲覧日：2015年９月７日）による.

13）大洗水族館への聞き取りによる.

14）大洗町の複数の宿泊施設経営者への聞き取りによる.

15）大洗町のサーフショップ店主への聞き取りによる.

16）７～８月の８～16時の遊泳時間中は大洗サンビーチではサーフィンが禁止されている.

17）宿泊施設経営者への聞き取りによる.

18）宿泊施設従業員への聞き取りによる.

［文　献］

青木栄一（1974）：海岸観光地. 浅香幸雄・山村順次編著『観光地理学』大明堂，69-72.

安藤寿男（2006）：関東平野東端の太平洋岸に分布する銚子層群・那珂湊層群・大洗層の地質学的位置づけ. 地質学雑誌，**112**(1)，84-97.

井口　梓・小島大輔・中村裕子・星　政臣・金　玉実・渡邉敬逸・田林　明・トム=ワルデチュク（2006）：九十九里浜における観光の地域的特性－白子町中里地区のテニス民宿を事例に－. 地域研究年報，**28**，127-166.

池　俊介・有賀さつき（1999）：伊豆半島大瀬崎におけるダイビング観光地の発展. 新地理，**47**(2)，1-22.

池　俊介（2001）：伊東市富戸におけるスキューバダビング導入に伴う地域社会の変容. 新地理，**48**(4)，18-37.

石井英也（1970）：わが国における民宿地域形成についての予察的考察. 地理学評論，**43**，607-622.

市川康夫・横山貴史・杉野弘明・水島卓磨・橋本暁子・木村昌司・田林　明（2012）：北茨城市平潟町における漁業地域の構造変容. 地域研究年報，**34**，1-37.

市川康夫・橋本暁子・横山貴史（2015）：茨城県北茨城市平潟町における水産資源を活用した観光地化. 田林　明編『地域振興としての農村空間の商品化』農林統計出版，299-315.

宇多高明・熊田貴之・清水達也・渡邉　徹（2012）：大洗港の南北海岸の長期的変遷－2011年大津波の影響も含む－. 土木学会論文集B3（海洋開発），**68**(2)，I_648-I_653.

宇都木宏一・北村　章・中川　健（1996）：千葉県長生郡白子町におけるテニス民宿の形成. 筑波大学大学院教育研究科社会科教育コース編『外房の自然と暮らし』87-106.

大洗町史編さん委員会（1986）：『大洗町史（通史編）』大洗町.

大洗町教育委員会生涯学習課（2013）：『大洗の歴史をめぐる』大洗町教育委員会生涯学習課.

小口千明（1985）：日本における海水浴の受容と明治期の海水浴. 人文地理，**37**(3)，23-37.

落合みどり・小沢雅人・里　昭憲・佐藤美津春・鈴木啓二朗（1982）：新島における観光産業の発展と民宿経営. 学芸地理，**36**，29-52.

加藤峰夫（2008）：「国立公園」の誕生と日本の国立公園の特徴. 加藤峰夫『国立公園の法と制度』古今書院，2-37.

金井　務・石川　周（2003）：『大洗の五十年』株式会社水戸カンツリー倶楽部・大洗ゴルフ倶楽部.

國木孝治（2012）：江戸時代後期における海水浴概念の伝播に関する研究－西洋医学書および医学教育の内容にみられる「海水浴」に着目して－. スポーツ史研究，**25**，57-64.

國木孝治（2014）：『我が国における潮湯治から海水浴への変化過程に関する歴史的研究』広島大学博士学

位論文.
呉羽正昭（2009）：観光業－首都圏の観光・レクリエーション地域－．斎藤　功・石井英也・岩田修二編『日本の地誌６　首都圏Ⅱ』朝倉書店，114-129.
小林勝法・西田亮介・松本秀夫（2012）：新島におけるサーフィンによる観光誘致の経緯．文教大学国際学部紀要，**22**(2)，13-24.
佐藤大祐（2001）：相模湾・東京湾におけるマリーナの立地と海域利用．地理学評論，**74A**，452-469.
蓼沼香未由（2007）：大洗における海水浴旅館の形成史．大洗町中央公民館特別講座「やさしい歴史講座」第１回配布資料.
淡野明彦（1985）：沿岸域における民宿型観光地域の形成－三重県鳥羽市相差地区の事例－．地理学評論，**58A**，19-38.
淡野明彦（1986）：沿岸域におけるリゾート型観光地域の形成－三重県志摩郡浜島町迫子地区の事例－．人文地理，**38**，7-25.
松村公明（1992）：児童の県内空間認識の形成－茨城県つくば市の児童を事例として－．新地理，**40**(3)，29-41.
松本至巨・有馬昌英・尾方隆幸（2000）：ひたちなか市阿字ヶ浦・磯崎地区における観光地域の構造．地域調査報告，**22**，207-242.
三村信男・加藤　始・角田義紀・宮本英明・伊佐治進（1991）：大洗における港湾構造物の建設に対する海岸地形の応答．海岸工学講演会論文集，**38**，401-405.
谷沢　肇・宇多高明・松浦健郎・菊池泉弥・福本崇嗣・熊田貴之（2009）：大洗港による那珂川流出土砂のトラップと遮蔽域内堆砂の実態．土木学会論文集B2（海岸工学），**65**(1)，566-570.
山村順次（2006）：多様な観光地域社会づくり．山村順次編『観光地域社会の構築－日本と世界－』同文館出版，1-23.
横山貴史・橋爪孝介・村上翔太・藤永　豪・吉田国光・田林　明（2013）：黒部市生地地区における漁業の変遷と地域資源を活用した漁村地域活性化の取り組み．人文地理学研究，**33**，145-173.
安村克己（2003）：サステイナブル・ツーリズムの理念と系譜．前田　勇編『21世紀の観光学 展望と課題』学文社，5-22.
山形雄三（1981）：『祝町昔がたり』.
Allan, M. W.（2003）：The End of Mass Tourism. 総合観光研究，**2**，1-10.
Butler, R. W.（1980）：The Concept of a Tourist Area Cycle of Evolution：Implications for Management of Resource. *Canadian Geographer*，**24**，5-12.